林俊雄先生の経歴と業績

学歴

一九四九年三月　東京都で生まれる
一九六七年四月　東京教育大学文学部史学方法論専攻（考古学）入学
一九七二年三月　東京教育大学文学部史学方法論専攻（考古学）卒業
一九七三年四月　東京大学大学院人文科学研究科修士課程東洋史学科入学
一九七六年三月　東京大学大学院人文科学研究科修士課程東洋史学科修了
一九七六年四月　東京大学大学院人文科学研究科博士課程東洋史学科入学
一九七九年三月　東京大学大学院人文科学研究科博士課程東洋史学科単位取得退学

職歴

一九七九年四月　（財）古代オリエント博物館研究員

一九八五年五月　（財）古代オリエント博物館主任研究員
一九九一年四月　創価大学文学部助教授
一九九四年四月　創価大学文学部教授
一九九五年四月　創価大学大学院文学研究科人文学専攻前期課程担当
一九九九年四月　創価大学大学院文学研究科人文学専攻後期課程担当

＊　＊　＊

一九八五年四月　駒沢大学文学部非常勤講師（博物館学）（～一九八六年三月）
一九八九年四月　国立民族学博物館共同研究員（～二〇〇一年三月）
一九九〇年一〇月　創価大学文学部非常勤講師（東洋史学）（～一九九一年三月）
一九九一年四月～二〇一九年三月）　清泉女子大学文学部非常勤講師（東洋史特講、西アジア文化史）（二〇〇九年より隔年
一九九一年四月　（財）古代オリエント博物館非常勤研究員（～一九九五年三月）
一九九一年　筑波大学歴史・人類学系兼任講師（東洋史特講）集中
一九九三年　神戸大学文学部兼任講師（東洋史特講）集中
一九九四年四月　上智大学文学部兼任講師（東洋史特講）（～一九九六年三月）
一九九五年　金沢大学文学部兼任講師（東西文化交流史特講）集中
一九九九年四月　（財）東洋文庫兼任研究員（二〇〇四年一〇月より客員研究員～現在）
一九九九年四月　宇都宮大学大学院国際学研究科兼任講師（陸域交流論）集中（～二〇一〇年）
二〇〇一年四月　早稲田大学第二文学部兼任講師（歴史民俗総合）（～二〇〇三年三月）

二〇〇二年四月　大阪教育大学大学院教育学研究科兼任講師（外国考古学特論・集中）
二〇〇三年四月　お茶の水女子大学文教育学部兼任講師（比較歴史学）（～二〇〇三年九月）
二〇〇五年四月　東京大学文学部兼任講師（東洋史特講）（～二〇〇七年三月）
二〇〇七年四月　中央大学総合政策学部兼任講師（文化交流史）（～二〇〇八年三月）
二〇〇八年四月　立教大学文学部兼任講師（超域文化学）（～二〇〇八年九月）
二〇一二年四月　慶應義塾大学文学部兼任講師（東洋史特講）（～二〇一三年九月）
二〇一三年四月　明治大学文学部アジア史学科兼任講師（中央ユーラシア史）（隔年～二〇一八年三月）
二〇一七年三月　中央大学文学部東洋史学科兼任講師（東洋考古学）（～二〇一八年三月）

所属学会

内陸アジア史学会（常任理事）
日本西アジア考古学会

業績

著書

1. 『ユーラシアの石人』雄山閣、二〇〇五年三月、二四五頁。
2. 『グリフィンの飛翔』雄山閣、二〇〇六年七月、二八二頁。

3. 『スキタイと匈奴　遊牧の文明』（興亡の世界史第二巻）講談社、二〇〇七年六月、三八〇頁。
『スキタイと匈奴　遊牧の文明』講談社学術文庫二三九〇、二〇一七年一月、四〇一頁。
4. 『遊牧国家の誕生』（世界史リブレット九八）山川出版社、二〇〇九年二月、九〇頁。

論　考

1. 「ソ連イェニセイ河源流域の城郭址」『考古学ジャーナル』第一二六号、一九七六年八月、二四～二七頁。
2. 「匈奴における農耕と定着集落」護雅夫編『内陸アジア・西アジアの社会と文化』山川出版社、一九八三年六月、三～一二頁。
3. 「鮮卑・柔然における農耕と城塞」（『古代オリエント博物館紀要』第五巻、一九八三年七月、三七七～三九四頁。
4. 「石塞山十七号墓出土四人楽舞俑、石塞山六号墓出土人物家屋銅飾り」『国華』第一〇八二号、一九八五年四月、二四～三二頁。
5. 「略奪・農耕・交易から観た遊牧国家の発展―突厥の場合―」『東洋史研究』第四四巻第一号、一九八五年六月、一一〇～一三六頁。
6. 'Agriculture and Settlements in the Hsiung-nu'『古代オリエント博物館紀要』第六巻、一九八五年一二月、五一～九二頁。
7. 「草原の民―古代ユーラシアの遊牧騎馬民族―」護雅夫・岡田英弘編『民族の世界史4：中央ユーラシアの世界』山川出版社、一九九〇年六月、二五～五八頁。
8. "The Development of a Nomadic Empire: The Case of Ancient Turks (Tuque)"『古代オリエント博物館紀要』

第一一巻、一九九〇年一二月、一三五～一八四頁。

9. 「ウイグルの対唐政策」『創価大学人文論集』第四号、一九九二年三月、一一一～一四三頁。

10. 「北方ユーラシアの大型円墳」『平井尚志先生古稀記念考古学論攷』第Ⅱ集、一九九二年三月、一六三～一九七頁。

11. 「突厥の石人に見られるソグドの影響―とくに手指表現に焦点を当てて―」『創価大学人文論集』第五号、一九九三年三月、二七～四四頁。

12. 「ユーラシア草原における騎馬と馬車の歴史」（共著）『馬の博物館研究紀要』第六号、一九九三年一二月、一～二四頁。

13. 「天山北麓の大型円墳」『草原考古通信』三、一九九三年一二月、二～五頁。

14. 「遊牧騎馬民族の移動と文明の興亡」『学術月報』第四七巻第一号、一九九四年一月、五三～五九頁。

15. 「ウイグル可汗国初期の石碑遺跡」片山章雄『迴紇タリアト・シネ＝ウス両碑文（8世紀中葉）のテキスト復原と年代記載から見た北・東・中央アジア』東海大学文学部、一九九四年一月、六～九頁。

16. 「北方ユーラシアの火打金―ウラル以東―」（『日本と世界の考古学―現代考古学の展開―』雄山閣出版、一九九四年三月、三五二～三六九頁。

17. 「北方ユーラシアの民族移動」安田喜憲・川西宏幸編『文明と環境Ⅰ：古代文明と環境』思文閣出版、一九九四年八月、二一六～二三九頁。

18. 「クルガン語源考」『草原考古通信』五、一九九五年三月、一〇～一六頁。

19. 「フン族あらわる」吉野正敏、安田喜憲編『講座　文明と環境6：歴史と気候』朝倉書店、一九九五年一二月、七八～九二頁。

20. 「天山北麓の仏教遺跡」『ダルヴェルジンテパＤＴ２５：1989―1993発掘調査報告』創価大学、一九九六年三月、一五四～一七八頁。
21. 「鞍と鐙」『創価大学人文論集』第八号、一九九六年三月、五三～九七頁。
22. 「草原遊牧文明は成立するか?」伊東俊太郎・安田喜憲編『講座　文明と環境２：地球と文明の画期』朝倉書店、一九九六年四月、一六〇～一七一頁。
23. 「遊牧民族スキタイの侵入」安田喜憲・林俊雄編『講座　文明と環境５：文明の危機―民族移動の世紀―』朝倉書店、一九九六年六月、三五～四八頁。
24. 「モンゴリアの石人」『国立民族学博物館研究報告』二一巻一号、一九九六年一〇月、一七七～二八三頁。
25. 「ホレズムの遺跡」『沙漠研究』六巻二号、一九九七年三月、二七～三六頁。
26. "Development of Saddle and Stirrup" *The Silk Roads and Sports. Record No.3 on the Silk Roads – Nara International Symposium.* 1997, pp.65-76.
27. 「草原遊牧文明論」『岩波講座　世界歴史３：中華の形成と東方世界』一九九八年一月、一二五～一四九頁。
28. 「スキタイ時代におけるグリフィン図像の伝播」『創価大学人文論集』一〇号、一九九八年三月、二一九～二四九頁。
29. 「東アジアのグリフィン」『創価大学シルクロード研究センター研究報告』一号、一九九八年三月、一三～二四頁。
30. 「草原遊牧民の美術」田辺勝美、前田耕作編『世界美術大全集　東洋編　第一五巻　中央アジア』小学館、一九九九年三月、五六～七二、三三六～三五一頁。
31. 「『ひげ付き』クルガンの分布―文化は国境を越えて―」『国立民族学博物館研究報告別冊』二〇号、

一九九九年三月、四〇九～四六一頁。

32. 『モンゴル国現存遺蹟・碑文調査研究報告』（共著）（森安孝夫・オチル責任編集）中央ユーラシア学研究会、一九九九年三月、一二一、一四一～一四二、一四八～一五七、一九六～二〇八頁。

33. 「遊牧国家の中の定住民」『シルクロード・奈良国際シンポジウム記録集』四、なら・シルクロード博記念国際交流財団、一九九九年三月、八八～九五頁。

34. “Sedentaries in the Nomadic States” *The Silk Roads of Sanzo-hoshi = Xuanzang: The Climate and His Foot-Steps. Record No.4 on the Silk Roads – Nara International Symposium.* 1999, pp.65-72.

35. 「草原世界の展開―中世の中央ユーラシア―」藤川繁彦編『中央ユーラシアの考古学』同成社、一九九九年六月、二六三～三三九頁。

36. 「グリフィンの役割と図像の発展―前五世紀まで―」『西嶋定生博士追悼論文集：東アジア史の展開と日本』山川出版社、二〇〇〇年三月、九五～一一〇頁。

37. 「草原世界の展開」『新版世界各国史　中央ユーラシア史』山川出版社、二〇〇〇年一〇月、一五～八八頁。

38. 「モンゴル高原北部の鹿石とヘレクスル」『考古学雑誌』第八五巻第三号、二〇〇〇年二月、九八～一〇二頁。

39. “East-West Exchanges as Seen through the Dissemination of the Griffin Motif” *Kontakte zwischen Iran, Byzanz und der Steppe in 6.-7. Jh. (Varia Archaeologica Hungarica IX)*. Ed. By Cs. Bálint, 2000, pp.253-265.

40. “Several Problems about the Turkic Stone Statues” (*Yearbook of Turkic Studies, Belleten 2000*. Ankara, Turkish Language Institution, 2001, pp.221-240)

41. 「遊牧民族の王権―突厥・ウイグルを例に―」『岩波講座　天皇と王権を考える３：生産と流通』二〇〇二年一〇月、一一五～一三九頁。
42. 「ユーラシア草原における馬の埋納遺跡（スキタイ時代以前）」小長谷有紀編『北アジアにおける人と動物のあいだ』東方書店、二〇〇二年一二月、一〇三～一五七頁。
43. "Uigur Policies toward Tang China" *Memoirs of the Research Department of The Toyo Bunko*. No.60, 2002, pp.87-116.
44. 「中央ユーラシア遊牧民の古墳から見た王権の成立と発展」角田文衛、上田正昭監『古代王権の誕生Ⅲ：中央ユーラシア・西アジア・北アフリカ編』角川書店、二〇〇三年六月、四六～六九頁。
45. "Sogdian Influences Seen on Turkic Stone Statues: Focusing on the Fingers Representations" Matteo Compareti *et al.*, ed., *Webfestschrift Eran ud Aneran: Studies Presented to Boris Ilich Marshak on the Occasion of His 70th Birthday*. Electronic Version, October, 2003.（No.50と同じ）
46. 「草原遊牧文明の環境考古学」安田喜憲編『環境考古学ハンドブック』朝倉書店、二〇〇四年二月、六三六～六四五頁。
47. "The Role of Sedentary People in the Nomadic States: From the Xiongnu Empire to the Uigur Qaghanate." *Urban and Nomadic Societies in Central Asia: History and Challenges. Proceedings of International Conference*. Almaty: Daik-Press, 2004, pp.117-134.
48. 「石人の謎」松原正毅ほか編『ユーラシア草原からのメッセージ――遊牧研究の最前線――』平凡社、二〇〇五年三月、二六三～二八九頁。
49. "Runic Inscription on a Roof Tile Found in Mongolia." *XIV. Türk Tarih Kongresi*. Ankara: Türk Tarih

Kurumu, 2005. III: 577-580, 4 figs.

50. Sogdian Influences Seen on Turkic Stone Statues: Focusing on the Fingers Representations. Matteo Compareti *et al.*, ed., *Eran ud Aneran: Studies Presented to Boris Il'ič Maršak on the Occasion of His 70th Birthday*. Venezia, Librairie Editrice Cafoscarina, 2006, pp.245-259.（No.45 と同じ）

51. First State Formation and the Construction of Tumuli: Especially Focusing on Scythian Tumuli. Diana Gergova, ed., *International Conference: The Getae – Culture and Traditions 20 Years Research of the Sveshtari Tomb and the Sboryanovo Reserve (Helis V)*. Sofia: Prof. Marin Drinov Academic Publishing House, 2006, pp.324-332.

52. The Origin of Nomadic Powers in the Eurasian Steppes. Academia Turfanica, ed. *Essays on the Third International Conference on Turfan Studies: The Origins and Migrations of Eurasian Nomadic Peoples.* 上海古籍出版社、二〇一〇年五月、三四六～三五二頁。

53. 「草原の考古学」菊地俊彦編『北東アジアの歴史と文化』北海道大学出版会、二〇一〇年一二月、一〇五～一二〇頁。

54. Mongolia, Central Asia and Northern China in the 6th-8th Centuries. *From Ötüken to Istanbul, 1290 Years of Turkish (720-2010)*. Istanbul, 2011, pp.363-370.

55. 「フン型鍑」草原考古研究会編『鍑の研究―ユーラシア草原の祭器・什器―』雄山閣、二〇一一年一〇月、三四一～三八二頁。

56. On the Origin of Turkic Stone Statues. *International Journal of Eurasian Studies*, N. S. 1 (11), Beijing, 2011, pp.15-25, 181-198.

57. 「ケルブ（ケルビム）＝スフィンクス説について」『第18回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』二〇一一年一二月、七八～九〇頁。
58. 「ユーラシアにおける人間集団の移動と文化の伝播」窪田順平監修、奈良間千之編『中央ユーラシア環境史1：環境変動と人間』臨川書店、二〇一二年三月、一六四～二〇八頁。
59. 「六～八世紀のモンゴリア、中央アジア、北中国―突厥王侯の墓廟から見た文化複合―」『史境』六四号、二〇一二年三月、一～一八頁。
60. Transition of the Stone Statues among the Turks from Early to Modern Times. In: *Srednevekovaya gorodskaya kul'tura i kochevaya tsivilizatsiya basseina Reki Ural*. Ural'sk: Zapadno-Kazakhstanskii oblastnoi tsentr istorii i arkheologii, 2012 (Sept.), pp.341-369.
61. The Birth and the Maturity of Nomadic Powers in the Eurasian Steppes: Growing and Downsizing of Elite Tumuli. *Ancient Civilizations from Scythia to Siberia* 19 (2013 June): 105-141.
62. 「遊牧国家における集落と都市―匈奴から柔然まで―」佐川英治編『大青山一帯の北魏城址の研究』（科研報告）、二〇一三年六月、一六一～二〇七頁。
63. Central Eurasia as a History World: Focusing on its Steppe Zone from the Archaeological Viewpoint. *International Symposium on History and Culture of Inner Eurasian*, Xilinhot. 2013 (Sept.), pp.21-36.
64. The Altai and Silla from the Viewpoint of Archaeological Findings. Proceedings of the 11th Seoul International Altaistic Conference. Seoul, The Altaic Society of Korea & Institute of Altaic Studies, SNU, 2013 (Dec.), pp. 415-432.
65. 「ヤールホト（交河故城）溝西墓地発見の匈奴・サルマタイ様式装飾品」高濱秀先生退職記念論文集編

集委員会編『ユーラシアの考古学』六一書房、二〇一四年二月、一五五～一六九頁。
66. 「二〇一三年西安発見迴鶻王子墓誌」『創価大学人文論集』二六号、二〇一四年三月、一～一一頁。
67. Griffin Motif. From the West to East Asia via the Altai. *Parthica 14 (Essays in Memory of Boris Anatol'evich Litvinsky)*: 2012 (2013), pp.49-64.
68. Tűzcsiholó szerszámok Kelet-és Nyugat-Eurázsiában. *Kőrösi Csoma Sándor mi a Magyar?*, Kovászna, 2014, pp.250-261.
69. 「公元前二世紀至公元二世紀之間的格里芬和竜」中国社会科学院考古研究所・新疆文物考古研究所編『漢代西域考古与漢文化』北京：科学出版社、二〇一四年八月、四九三～五〇四頁。
70. 「中央アジアの王墓」アジア考古学四学会編『アジアの考古学２：アジアの王墓』高志書院、二〇一四年一一月、一一九～一三九頁。
71. 「西アジアの石像――新石器時代――」『西南アジア研究』八一、二〇一四年九月、二四～四一頁。
72. 「キプチャクの石人とイスラーム化後の墓石から見たテュルク系諸族の人間表現」『第二一回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』二〇一四年一二月、一二〇～一三八頁。
73. Xiongnu (Hun) – Sarmatian Style Ornaments Found near Turfan. *1st International Congress of Eurasian Turkish Arts*. Oct. 2014, pp.45-52.
74. Agriculture and Fortification of the Xianbei and the Rouran. *In memorium Yuri Zuev. Kul'turno-istoricheskie protsessy v Tsentral'noi Azii (drevnost' i srednevekov'e)*. Almaty, 2012, pp.158-167.
75. Has the Orhon Valley been a Center of Nomadic Powers?: From the View Point of Archaeological Sites. *VIII. International Turcology Congress (30 September – 04 October 2013 – Istanbul)*. Istanbul, 2014, pp.491-

509.

76. Illig Qayan or Illik Qayan? A Small Inscription on a Roof Tile. I. Nevskaya & M. Erdal, eds. *Interpreting the Turkic Runiform Sources and the Position of the Altai Corpus*. Berlin: Klaus Schwarz Verlag, 2015, pp.46-54.

77. Huns were Xiongnu or not? From the Viewpoint of Archaeological Material. İlhan Şahin *et al*. ed. *Altay Communities: Migrations and Emergence of Nations*. Istanbul, 2014, pp.13-26.

78. Central Eurasia as a History World: Focusing on its Steppe Zone from the Archaeological Viewpoint. 特力更、李錦繡、編『内陸欧亜歴史文化国際学術研討会論文集』内蒙古人民出版社、二〇一五年八月、一～一六頁。

79. 「西アジアにおける鞍と鐙の使用について（上）」『第二二回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』二〇一五年一二月、七九～九二頁。

80. The Importance of the Steppe Silk Road: *Archaeological Findings of the Altai. The Eastern Silk Roads Story: 2015 Conference Proceedings*. UNESCO: Paris & Bangkok, 2016, pp.63-72.

81. Fire-steels in Eastern and Western Eurasia. *International Journal of Eurasian Studies, N. S. 4*, Beijing, 2016, pp.1-14.

82. Change from Turkic Stone Statues to Mongolian Stone Statues. *Belleten (Yearbook of Turkic Studies)* 60-1, 2012, pp.15-38.

83. Epitaph of an Uighur Prince Found in Xi'an. *Belleten (Yearbook of Turkic Studies)* 61-2, 2013, pp.209-214.

84. Kypchak Stone Statues: From Kazakhstan through South Russia to Mongolia. *Altai among the Eurasian Antiquities*. Novosibirsk: Institute of Archaeology and Ethnography, Siberian Branch of the Russian

Academy of Sciences, 2016, pp.479-486.

85. 「ユーラシア草原における遊牧国家の形成と展開」大沼克彦・久米正吾編『キルギスとその周辺における遊牧社会の形成』（科研論文集）二〇一七年一月、九五～一〇五頁。

86. 「クラスナヤ・レチカ Krasnaya Rechka 遺跡の仏教遺跡」帝京大学文化財研究所編『二〇一六年度中央アジア遺跡調査報告会資料集』二〇一七年一月、三九～五三頁。

87. 「欧亜草原游牧政権的出現与成熟」余太山、李錦繡編『欧亜訳叢』第二輯、二〇一六年一〇月、二五～五九頁。

88. Fire-steels in Mediaeval Eastern Eurasia. *III International Congress of Medieval Archaeology of the Eurasian Steppes*. Vladivostok: Dalnauka, 2017, pp.281-289.

89. 「モンゴル中北部の鹿石」『考古学研究』六四巻二号、二〇一七年九月、一一二～一一四頁。

90. The Xiongnu Fortresses, Judging from Written Sources.『第八屆〝蒙古、貝加爾西伯利亜与中国北方古代文化〟国際学術研討会』長春：吉林大学辺疆考古研究中心、二〇一七年九月、二四〇～二四五頁。

91. 「中央アジアにおける農耕の起源と展開」アジア考古学四学会編『アジアの考古学４：農耕の起源と拡散』高志書院、二〇一七年一〇月、二七三～二八五頁。

92. 「遊牧国家匈奴の王侯墓」Comparative Archaeology of Ancestral Rites at Royal Ancestral Shrines and Tombs inEast Asia. Gyoeongiu: Cultural Heritage Administration, pp.53-70.

93. On the Dating of the So-called Polychrome Ornaments Incrusted with Red Stones: Concerning the Controversy between I. P Zasetskaya and A. K. Ambroz. *Actual Problems of Archaeology and Ethnology of Central Asia*. Ulan-Ude: The Buryat Scientific Center SB RA, 2017, pp.139-143.

94. 「車の起源と発展」鶴間和幸・村松弘一編『馬が語る古代東アジア世界史』汲古書院、二〇一八年二月、三〜三八頁。
95. Eurasian Steppe Silk Road: Past and Future. The 4th Annual International Conference of International Association for Silk Road Studies (IASS): A Study on the Concept of Silk Road. Gyeongju, 2018, pp.76-83.
96. 「ユーラシア草原文化と樹木」山口博監修・正道寺康子編『ユーラシアのなかの宇宙樹・生命の樹の文化史（アジア遊学 228）』勉誠社、二〇一八年一二月、四七〜六一頁。

調査報告

1. 「新疆アルタイ地区の遺跡（一）」（『草原考古通信』一、一九九三年二月、二〜七頁。
2. 「新疆アルタイ地区の遺跡（二）」（『草原考古通信』二、一九九三年七月、二〜五頁。
3. 「ダルヴェルジン＝テペの調査」『ラーフィダーン』第XV巻、一九九四年三月、一〇〇〜一〇三頁。
4. 「一九九五年西モンゴル調査行（1）」（『草原考古通信』七、一九九六年四月、二〜十九頁。
5. 「一九九五年西モンゴル調査行（2）」（『草原考古通信』八、一九九七年四月、一一〜二七頁。
6. 「遺跡の宝庫、モンゴル」小長谷有紀編『アジア読本　モンゴル』河出書房新社、一九九七年一二月、一〇六〜一一五頁。
7. 「遺跡からみた遊牧民」小長谷有紀、楊海英編著『草原の遊牧文明―大モンゴル展によせて』千里文化財団、一九九八年七月、一一三〜一一五頁。
8. 「天山山中の新発見」『しにか』第九巻第七号、一九九八年七月、三〇〜三五頁。
9. 「セレンゲの流れにそって―その遺跡と環境―」『エコフロンティア』第二号、一九九九年四月、三〇〜

三七頁。

10. 「一九九五年西モンゴル調査行（3）」『草原考古通信』一〇、一九九九年七月、一〇～二二頁。
11. 「一九九九年度モンゴル調査報告―オラーン＝オーシグ山周辺の遺跡調査を中心に―」『草原考古通信』一一、二〇〇〇年五月、一～二八頁。
12. 「一九九五年西モンゴル調査行（4）」『草原考古通信』一二、二〇〇一年一月、html 版。
13. 「二〇〇九年、ロシア領アルタイ、発掘調査事情報告」『オアシス地域研究会報』第八巻第一号、二〇一〇年三月、一一九～一二四頁。
14. 「二〇〇九年アルタイ調査―匈奴・フン同族説は成立するか―」『第一七回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』（金沢大学）二〇一〇年一二月、三一～三二頁。

書評・研究動向

1. 「ソ連科学アカデミー編『シベリア史』第一巻」『史学雑誌』第八〇編第一二号、一九七一年一二月、六七～七二頁。
2. 「北アジア：回顧と展望」『史学雑誌』第八五編第五号、一九七六年五月、二四〇～二四五号。
3. 「ベー＝イェ＝クメコフ著『アラビア語史料による九～一一世紀のキーマーク国家』」『東洋学報』第五八巻第一・二号、一九七六年一二月、二〇九～二一四頁。
4. 「エム＝シネフー著『新発見のタリアト・オルホン文字碑文』」『東洋学報』第五八巻第三・四号、一九七七年三月、一三九～一四二頁。
5. 「『中世のシベリア・内陸アジア・東アジア』」『東洋学報』第六〇巻第一・二号、一九七八年一一月、

一九五～一九九頁。

6. 「中央アジア：回顧と展望」『史学雑誌』第九一巻第五号、一九八二年八月、二五〇～二五四頁。
7. 「ハザール可汗国史の研究動向」『古代文化』第三九巻第八号、一九八七年八月、四〇～四三頁。
8. 「トラキア『ロゴゼン遺宝』の発見」『古代文化』第四〇巻第八号、一九八八年八月、三三～三六頁。
9. 「山田信夫著『北アジア遊牧民族史研究』」『東洋史研究』第四八巻第三号、一九八九年一二月、一六一～一六八頁。
10. 「モンゴル草原における古代テュルクの遺跡」『東方学』第八一輯、一九九一年一月、一六六～一七九頁。
11. 「小長谷有紀著『モンゴル草原の生活世界』」『民博通信』七五号、一九九七年一月、六二～六四頁。
12. 「沢田勲著『匈奴―古代遊牧国家の興亡』」『東方』一九五号、一九九七年年六月、二〇～二三頁。
13. 「ドイツ考古学研究所の最近の活動」『草原考古通信』第一〇号、一九九九年七月、二～四頁。
14. 「スキタイに関する様々な問題――スキタイ研究の現状――」『エルミタージュ美術館名品展――生きる喜び――』日本経済新聞社、二〇〇一年七月、一一～一五頁。
15. 「まずは資料の獲得を――ユーラシア考古学の立場から――」『明日の東洋学』第六号、二〇〇一年一一月、三～四頁。（東京大学東洋文化研究所編、『アジア学の明日にむけて』白峰社、二〇〇八、二二八～二三三頁に補記とともに再録）。
16. In Memory of the Late Professor Egami Namio *Memoirs of the Research Department of The Toyo Bunko*. No.60, 2002, pp.123-129.
17. 「江上波夫先生と内陸アジア研究」『内陸アジア史研究』第一八号、二〇〇三年三月、七五～七八頁。
18. 「遊牧社会論」『歴史と地理』五九六号、二〇〇六年八月、三〇～三三頁。

19. 「中央ユーラシアにおける考古学研究――近二〇年の中央アジア・シベリア・モンゴル――」『内陸アジア史研究』第二六号、二〇一一年三月、五二～五七頁。
20. Trends in Central Eurasian Archaeology since the Late 1980s. *Asian Research Trends*, New Series 6 (2011), Tokyo: The Toyo Bunko, pp.1-22.
21. 「騎馬遊牧民の誕生と発展―スキタイ時代から突厥・ウイグルまで―」小松久男・荒川正晴・岡洋樹編『中央ユーラシア史研究入門』山川出版社、二〇一八年四月、一七～三二頁。
22. 「日本の草原シルクロード研究の回顧――現地調査を中心に――」Trends and Prospects of the Silk Road Studies in East Asia. Seoul: Korea Institute of Civilizational Exchanges, 2018, Dec., pp.89-99.

翻訳

1. A.D. グラーチ著「内陸アジア最古のチュルク族の火葬墓」（共訳）『考古学ジャーナル』第四九号、一九七〇年、一一～一五頁。
2. A.M. ベレニツキー、E.E. クジミナ著「中央アジアにおけるウマ信仰」（『ユーラシア』新一号、一九八三年一一月、七九～一〇五頁。
3. S.I. ヴァインシュテイン、M.V. クリュコフ著「『李陵の宮殿』、あるいは一つの伝説の終り」『ユーラシア』新二号、一九八五年一月、二～二二頁。
4. M.V. フェフネル著「中世ロシアの絹織物」『ユーラシア』新二号、一九八五年一月、一〇九～一二七頁。
5. A.P. ヂェレヴャンコ著「日本石器時代の旅」『ユーラシア』新二号、一九八五年一月、一二八～一三一頁。
6. ヴェロニック＝シルツ著「スキタイとユーラシア草原」田辺勝美監訳『世界考古学大図典』同朋舎、

一九八七年二月、二一〇～二二五頁。

7. 『中世初期ユーラシア草原における馬具の発達』（編訳）（馬の博物館叢書）根岸競馬記念公苑、一九八八年一二月。

8. 『NHKエルミタージュ美術館　第四巻：スキタイとシルクロードの文化』（共訳）日本放送出版協会、一九八九年五月。

9. B.A. リトビンスキー著「シルクロードに占める中央アジアの役割」『海のシルクロードを求めて』三菱広報委員会、一九八九年一一月、二四二～二五九頁。

10. 『南ウズベキスタンの遺宝』（共訳）創価大学出版会、一九九一年一月。

11. クリス＝カー編『世界考古学地図』（共訳）朝日新聞社、一九九一年一〇月。

12. 『スキタイ黄金美術展』（共編訳）日本放送協会、一九九二年七月。

13. タバルディエフ著「アク＝ベシム出土釈迦如来坐像」『シルクロード研究』第二号、二〇〇〇年三月、九一～九五頁。

14. ZHANG Yuzhong（張玉忠）: Discoveries and Investigations of the Barrows in the Ili Basin. *Bulletin of the Ancient Orient Museum* XXI (2000): 37-64 (translated from Chinese into English).

15. タバルディエフ、ソルトバエフ著「天山山中のルーニック碑文を伴う岩画」『シルクロード研究』第三号、二〇〇二年三月、四一～四九頁。

16. クリャシュトルヌィ著「中央天山で発見された古テュルク・ルーニック碑文」『シルクロード研究』第三号、二〇〇二年三月、五一～五六頁。

17. 『ウクライナの至宝展――スキタイ黄金美術の煌めき――』ブレーントラスト、二〇一一年九月（翻訳・

監修）。

その他

1. 「ユーラシア草原の古代騎馬民族」『不思議古代大百科』（トワイライトゾーン別冊）KKフォトプレス、一九八五年五月、三三～四七頁。
2. 「突厥の石人」『モンゴリカ』第一巻第三号、一九八五年一二月、二四～二六頁。
3. 「トルコ東南部辺境地帯を旅して」『青淵』四六〇号、一九八七年七月、三〇～三三頁。
4. 「トルコの博物館・遺跡を訪ねて」『西アジア考古学通信誌』三号、一九八七年一〇月、一〇～一七頁。
5. 「西アジアの考古学関係本屋。アンカラ、イスタンブル」『西アジア考古学通信誌』三号、一九八七年一〇月、二四～二八頁。
6. 「聖獣博物誌8　グリフィン」江上波夫監『夢万年――聖獣伝説』講談社、一九八八年四月、一四八～一五一頁。
7. 「大草原の石人―遊牧民の死生観―」『週刊朝日百科・世界の歴史一九：遊牧騎馬の民』一九八九年4月、一二〇～一二四頁。
8. 「遊牧国家の中の定住民―匈奴からウイグルまで―」『週刊朝日百科・世界の歴史二七：民族と移動』一九八九年五月、一七二～一七五頁。
9. 「草原に立つ石人」『オリエンテ』第一号、一九九〇年五月、一〇～一五頁。
10. 『騎馬民族の謎』（共著）学生社、一九九二年一二月、一三六～一八五頁。
11. 「シルクロード翔けるグリフィン」『清泉文苑』第一二号、一九九五年三月、三五～三七頁。

12. 「草原の道」（第九回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編『アジアの古代文明を探る―歴史と水の流れ―』クバプロ、一九九五年九月、七四～八五頁。
13. 「ヤールホトの『王冠』」『季刊文化遺産』四号，一九九七年一〇月，三八～四〇頁。
14. 「古代騎馬遊牧民の活動」若松寛編『アジアの歴史と文化7　北アジア史』同朋舎、一九九九年四月、一四～三一頁。
15. 「騎馬遊牧民と黄金――黄金発見と盗掘の歴史――」『季刊文化遺産』一二号、二〇〇一年一〇月、八～一一頁。
16. 「オクサス遺宝――ペルシアと草原の接点――」『季刊文化遺産』一二号、二〇〇一年一〇月、二六～二七頁。
17. 「フンの黄金文化」『季刊文化遺産』一二号、二〇〇一年一〇月、五〇～五三頁。
18. 「中世遊牧民の黄金文化――テュルク系遊牧民の拡大――」『季刊文化遺産』一二号、二〇〇一年一〇月、五六～六〇頁。
19. 「モンゴル高原に遊牧民が残した遺跡」『ユーラシアを駆ける――遊牧世界とオロンスム遺跡――』横浜ユーラシア文化館、二〇〇五年三月、一〇～四〇頁。
20. 「草原の小さな英雄『石人』」『新シルクロードの旅2：敦煌・ホータン・クチャ・イーニン』講談社、二〇〇五年六月、三八～四七頁。
21. 「唐の時代のキルギス」、「玄奘三蔵」、「匈奴」『週刊朝日百科シルクロード紀行』一二、朝日新聞東京本社、二〇〇五年六月、一二～一五、一八～一九、二二頁。
22. 「突厥の歴史と文化」『国士舘東洋史學』一、二〇〇六年六月、一七五～一八〇頁。

23. 「『スキタイと匈奴』について」『トンボの眼』九、二〇〇七年七月、九～一〇頁。
24. 「騎馬遊牧民スキタイと東西文化交流――グリフィン図像の伝播と変容に焦点を当てて――」『オリエンテ』第三六号、二〇〇八年二月、一三～二〇頁。
25. 「ユーラシア草原の遊牧文明とその歴史的役割」『世界平和研究』通巻一七七号、二〇〇八年五月、一五～二六頁。
26. "Karabalgasun, i. The site." Encyclopaedia Iranica, vol. XV, Fasc. 5, 2010, pp.529-530.
27. 「スキタイ王侯の葬儀――トゥスタ＝モヒーラ古墳を例にして――」『ウクライナの至宝展――スキタイ黄金美術の煌めき――』ブレーントラスト、二〇一一年九月、一〇～一三頁。
28. 「遊牧民の遺跡―古墳、黄金人間、岩画、石人―」宇山智彦・藤本透子編『カザフスタンを知るための60章』明石書店、二〇一五年三月、七八～八二頁。
29. 「ビザンツ史料から見たテュルク」小松久男編『テュルクを知るための61章』明石書店、二〇一六年八月、一八九～一九三頁。
30. 「冒頓単于」鶴間和幸編『悪の歴史　東アジア編【上】』清水書院、二〇一七年九月、一五〇～一六三頁。
31. 「加藤九祚先生の思い出」『ユーラシア研究』五六、二〇一七年八月、三八～四一頁。
32. 「『旧約聖書』のケルブ（ケルビム）はスフィンクスか、グリフィンか？」『オリエンテ』五六号、二〇一八年三月、一〇～一七頁。